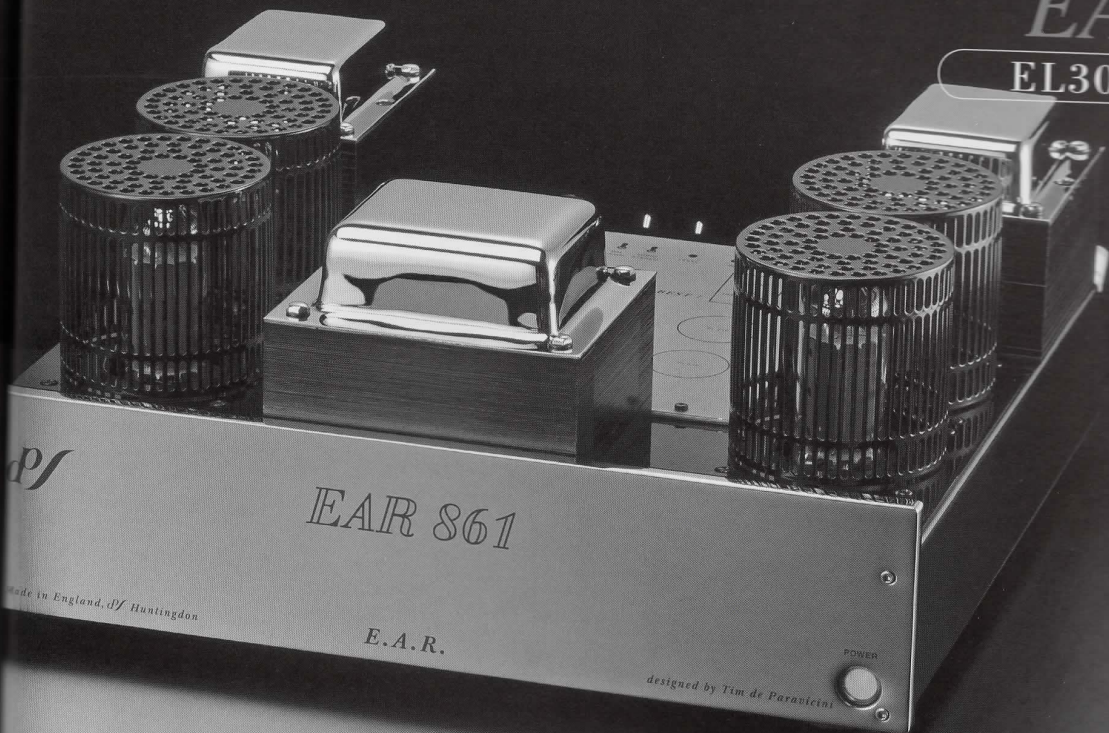


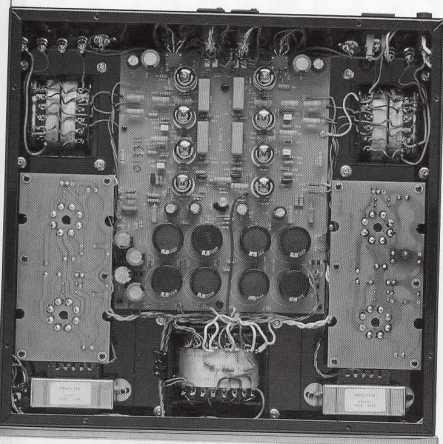
EA
EL309



Power Amplifier

EAR EAR861 ¥978,000

●出力：32W+32W (8Ω)、64W (モノラル) ●入力端子：LINE1系統 (RCAアンバランス／XLRバランス切替え) ●入力感度：900mV ●負荷インピーダンス：4Ω、8Ω、16Ω ●使用真空管：ECC83×2 (自社銘)×2、PCC88 (自社銘)×6、EL309 (自社銘)×4 ●寸法／重量：W400×H150×D420mm／29kg ●同合せ先：ヨシトレーディング ☎050 (3375) 3975



左右対称の内部レイアウトで、前段のECC83とPCC88を中央の基板に配置する。全段差動増幅回路で組まれる。



スピーカー出力端子は4Ω、8Ω、16Ω。ステレオ／モノラル切替スイッチを装備する。



出力管
ビーム管
自社銘
EL309

【真空管と回路設計について】

ティム・デ・パラヴィチーニ氏設計によるEL309プッシュプルパワーアンプ。EL309は従来のEL509と同一規格のビーム管だが、JJエレクトロニック社のEL509の中からEAR社が厳選したものにEL309と名付けたとのこと。回路は、氏の技術として知られる「エンハンスド・トライオード・モード」がキーポイント。これは出力管のコントロールグリッドとカソードを結んで同電位とし、スクリーングリッドに信号を入力するという独特の3極管接続法だ。3極管特有の美しい音と多極管の力強い表現力を両立させるために考案したのだという。さらに、差動増幅回路をはじめオーバーオールでのNFBを排除した設計、あるいは氏自らが設計した大型・広帯域の出力トランスなども高音質を支える。

(篠田)

ビーム管。プッシュプルならではの力感と

練り上げた芳醇さを整いよく聴かせる。前に出る音で音楽の妙味を懐深く描く

高津 出力管はテレビの水平偏向用に使われたビーム管、自社銘のEL309です。ドライバード段をカソードフルオロアード回路で組み、全段差動入力、全段シンメトリのプッシュプル回路としています。「エンハンスド・トライオード」と名付けた、スクリーングリッドに信号を入力するEARR独自の回路設計のアンプです。

篠田 電源の整流は半導体を用いています。トランスは自社設計品だそうです。音の一粒一粒を丁寧に拾って音楽の全体像を構築して行くという、緻密な音と感じました。また、明るくレンジの広い現代的な音でもあります。「モーツァルト」は、弦のこまやかな動き、木管の柔らかさや膨らみをうまく描きました。それに演奏している場の空気感も鮮明に出ていて、臨場感のある音を聴かせます。なかなか巧みな音作りだと思いますが、このあたりはスタジオ用アンプも数多く手掛けている設計者の

タイム・デ・パヴイチーニ氏の豊富な経験が物をいっているような気がしますね。

高津 どちらかというとき低域優勢型の音を聴かせたと思います。ローエンドの上の基音の帯域が少しフワツとした感じで膨らんでいて、高域には独特の艶を乗せたようなEARRならではの老練な音作りではないでしょうか。しなやかさや、豊満さや芳醇さといった真空管らしい持ち味がありますが、3極管の透明感というのとは違って、大型管によるハイパワーアンプの、うまく料理された美音と感じます。大出力がありながら緻密でよく練られて、懐深く悠然とした音をきれいに整えて聴かせる、大人っぽいまとまりです。

篠田 「ロリンズ」は低音域の量感が豊かで、しかも伸びやかな力感があります。ビーム管プッシュプルらしいアンプの力を感じました。

高津 たつぷりとしたベースが、けっしてふやけないんですね。

篠田 さちんと締まっています。最盛期のロリンズの凄みがストリートに伝わってきます。ドライブ感たっぷりの小気味よい演奏が楽しめました。

高津 若々しいエネルギーが、こちらに迫って来ますね。

篠田 小さなことにはこだわらない闊達でしかもエネルギーが聴けました。タンノイがアメリカのスピーカーのように前へ前へと出て来るエキサイティングな鳴り方をしたのも驚きです。

「石川さゆり」は、カラッと朗々と歌うのが印象的です。円熟味のある面白い歌い方ではありますが、日本の流行歌が持つしっとりとした情緒、憂いや陰りといったものはあまり感じられませんでした。少しバタつくさいポップス的な歌唱という雰囲気ですね。

高津 柔らかく太めの鉛筆で描くような、恰幅のいいヴォーカルになりました。日本の歌謡曲を間近に細密に聴くというのとは、表現の方向性が異なります。丁寧に歌っている姿がさらにクリアーに見えるという感じはあります。

高津 少し大げな描き方ですね。

高津 「ホルスト」は、渾然一体となったオーケストラのエネルギーを力強く出します。現代的な再現というわけではないんですが、66年録音のオーケストラの特徴をうまく捉えて聴かせ、説得力があります。中域がピンと張って、タンノイが朗々と鳴ります。元気がいいだけに、すべての音が前に来るような感じはあつて、もう少し興行きのあるステレオイメージ、細部の緻密な表現があると、なお好ましいでしょうね。

篠田 「モーツァルト」の対極にある再現です。ひとつひとつのこまかな音を積み重ねながら音楽の全体像を仕上げて行くというのではなく、オーケストラから湧き上がる響きを丸ごと捉えてドーンと出すという豪快な聴かせ方なんです。オーケストラ全体のエネルギーが溢れ出て来るような再現ともいえます。ピアノシモからフォルティシモに向かって演奏が盛り上がり、過程のグラデーションもよく表現します。

「モーツァルト」ではデリカシー、「ホルスト」ではダイナミズム。音楽をそれぞれのエッセンスをじょうずに引き出し、楽しく聴かせるという感じです。こんな描き方も、パヴイチーニ氏の狙い通りなんでしょうね。

個性派出力管

パワーアンプが描く魅惑のサウンド